

幸福の掟

食卓にあるべきもの

食卓に並ぶのは、なにも料理だけではない。

湯気のたった白飯。副菜には、かぼちゃの煮付け、きんぴらごぼう、ホウレン草のおひたし。メインデッシュは、煮込みハンバーグ。デザートに、焼きリンゴがあってもいい。

食卓の上には、所狭しに料理が並べられている。何品目あるのか、数えきれない。どれから箸をつければいいのかもわからない。贅沢な悩みだ。

しかし、こんな食事がおいしく感じられないこともある。母親の料理が不味いわけではない。もし他人からすれば不味くても、自分にとってのおふくろの味はいつだって美味しい。

父が倒れた。どうやら、かなり厄介らしい。

一旦、病院から帰った母は泣いている。兄弟喧嘩か両親に怒られてしか、泣いたことのない弟も泣いている。でも、僕は意地でも泣かなかった。

僕まで泣いてしまうと、本当にダメになる気がした。

その日から、食卓の椅子には空きが出来るようになった。

母が泊まりで見舞いに行くときは、空きが一つから二つになった。ますます食事が湿っぽくなった。それは料理が何時間も前の作り置きだから、というわけだけではない。前の日の残り物でも、美味しいときは美味しかったのだから。

手術は成功した。しかし、後遺症で右半身に少しマヒが残った。これからはリハビリの毎日だそう。リハビリが上手いけば、ほぼ以前のように生活出来るようになるらしい。

その知らせを聞いた日の夕飯は、何だか久々に味を感じたような気がした。たしか、コンビニ弁当だったはずだ。

ついに退院の日が来た。父に会うのは、父が倒れて以来だ。病院に来るな、と父に言われていたからだ。学校から帰ると、以前より線が一まわりか二まわり細くなっていたが、変わらない背中を見つけた。懐かしいような、照れくさいような不思議な感覚だった。

父はまだおぼつかない足取りで、自分の席についた。

右には弟、前には母、右前には父。席が全て埋まっている。

食卓にあるべきものが、やっとすべて並んだ。

その日のカレーが格別に美味かったのは、決して一日寝かしたせいだけではない。

「えーと、もうすぐ3カ月です」

「ご飯はお盆のどっちだっけ？」

「左です」

「だよ、これ右だよ。いい加減ちゃんとしてくれないかな。だいたい、どうしてご飯は左か覚えてる？」

「それは右利きの人、箸が右手で、茶碗を持つのが左だからですよ」

「わかっているなら、どうしてそうしないの？」

「わかっているから、そうしないんですよ。仮に店長がお盆の上の食器の並びを統一したくて、特に理由もなくご飯が左でおかずが右に決めたなら、僕も大人しく従います。けど、店長の推す理由なら僕は納得いきません」

「普通の人間は理由があることに納得するものなのに、どうしたもんだかね。そもそも、テーブルマナーってのがあるんだけど」

「別に僕はテーブルマナー自体にけちをつけているわけじゃないんですよ。そりゃ、右利きの人に対してご飯を左に置くのは、理にかなっていませんよ」

「じゃあどうして？」

「それじゃあ聞きますけど、どうしてお客さんに右利きか左利きか尋ねないんですか？ 結局、テーブルマナーを中途半端に実践して、客に厚いもてなしをしている気になっているだけなんです。一方通行で、エゴイスティックですよ、そんなものは。例えるなら、俺がラブレター書いてやったんだから、当然俺のこと好きだよなって迫っているようなものですよ」

「君、どこの大学だったっけ？」

「K大ですけど、それが？」

「やっぱり典型的な勉強のしすぎだよ。もっと気楽に生きなきゃ、この先しんどいよ」

「店長はどこの大学出身ですか？」

「S大だよ」

「どこですかそれ？ そんな大学聞いたことないですね。あっ、いらっしやいませー」

「いらっしやいませ。あのお客様、最近よく来られるんだよ。昨日気付いたんだけど、いつも熱いお茶と親子丼頼まれるんだ。だから、お冷と一緒に先にお茶も持って行ってあげてよ」

「いやでも…」

「どうしたの、ごちゃごちゃ言っていないで早く」

「わかりました、いってきますよ」

「どうだった？」

「特別嬉しそう顔ではなかったですよ」

「おかしいな、今日はお茶飲みたくなかったのかな？」

「だからね、店長はなんにもわかってないんですよ」

「あっ、お客様がお呼びだよ」

「いってきます」

「何だったの？」

「もう一杯熱いお茶が欲しいらしいです」

「あれっ、お茶おかわりまでするんだ」

「僕、わかりましたよ」

「何が？」

「あのお客さんは、『熱いお茶』が欲しいわけじゃないんですよ」

「どういうこと？ 意味がわからないな」

「『熱いお茶を店員に頼む』ことがお客さんの楽しみなんです。わかりますか？ 店長は、脅迫まがいのラブレターをまた書いてしまったんですよ。客観的で献身的な自分を謳っているつもりでも、中途半端なそれは主観的で自慰的なんですよ」

「なんだかわからないけど、俺が悪いのか？ そうなのか？」

「それとね、僕左利きなんです。覚えておいてください」

—すいません、カツ丼下さい。

例え話をしよう。

勤勉で誠実。他にも挙げればキリがないほどに、つまりは悪というものから一番遠い青年がいるとしよう。そんな彼を憎むものなんていない、もはや男でも惚れるてやつだ。もし彼に良からぬ感情を抱くものがいたとしても、それはただの嫉妬だろう。嫉妬なんていうのは一種の愛みたいなもので、気にすることはない。むしろ歓迎すべきだ。

そんな彼が人を殺した。

どうして？ と言いたくなるだろうが、彼にも色々事情があるわけだ。復讐だよ。彼がうんと幼い頃、目の前で母親が強姦魔に犯されたのち絞め殺された。いや、絞め殺されつつ犯された、の方が正確かな。まあ、犯罪者の性癖にも色々さ。要するに彼はその犯人に復讐すべくそいつを殺ったんだよ。

別の話をしよう。

今度の青年も勤勉だ。しかし根暗で陰気で、パツとしない。さっきの彼が昼なら、こいつは夜だ。こんな人間いくらでもいるじゃないかと思うだろう？ そう実際、日常生活に何の問題もないのだけど、彼は大きな問題を抱えているわけだ。心の闇さ。

彼は日記をつけている、きちんと毎日。勤勉だろ？

彼は何人もの人間を殺している。多い日には10人を越すし、中には通産3回も殺されているやつもいる。彼の性格が苛められたり理不尽をこうむることが多い。そりゃ彼だって腹の中は煮えくりかえっているよ、けど反発したくても出来ない、そういう性格だから。それでその腹いせに殺すんだよ彼は、日記の中で。けど、彼のいけないところは関係のない人まで殺すことだ。街中でいちゃつくカップルを殺すことだってある。他には政治家、弁護士、医者、道の邪魔だから老人だって、無差別殺人を彼は毎晩行っている。

さて、本題に戻ろうか。

何の例え話だったんですかって、何だっていいじゃないか。気にすることはない。大事なのは君が有罪か無罪かだろ？

「今日は牛肉が安いよ。すき焼きにどうだい？」

「何言ってんだ。すき焼きには豚肉だろ」

「おいおい冗談だろ。豚のすき焼きなんて聞いたことねえ。すき焼きには牛、常識だろ」

「そっちこそ、冗談が過ぎるぞ。すき焼きには豚、これが常識いや良識だ」

「わかった。いいよ、それで。ところで今日の裁判どうだったんだい？」

「万引き少年だよ」

「おお！ 俺も明日万引き少年担当なんだよ。どう処罰したよ？」

「処罰もなにも、無罪だよ」

「まさか何も盗んでなかったのかい？」

「しっかり盗んでたよ。筆箱」

「じゃあどうして？」

「その文具屋の息子が同級生で、そいつに大事な筆箱奪われたんだってさ」